

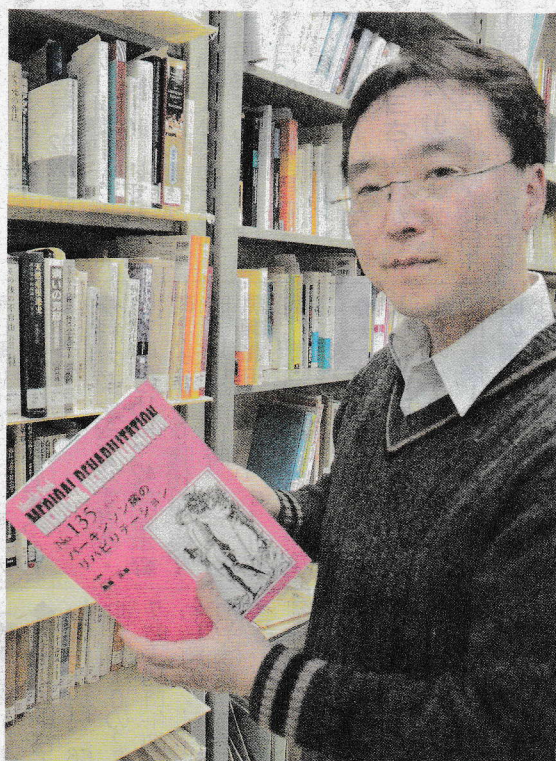
富山大准教授 伊藤 智樹 さん 40 (富山市)

手足の震えや歩行困難などの症状がみられる難病・パーキンソン病患者のリハビリに付き添い、ストレッチ体操に汗を流す。風呂場で背中を流し、トイレの介助もする。患者からは「先生」と慕われる。「福祉施設の職員でも医師でもない。端から見れば、あいつは何者なのかと思うでしょうね」と笑う。

愛媛県生まれ。東京大学同大学院で社会学を学んだ。医療社会学が専門で、富山大の専任講師を経て2003年に准教授となり、アルコール依存症や吃音、肉親らとの死別体験など、共通の悩みを抱える人たちが支え合う自助グループの活動を研究してきた。

転機は同年初。研究室を訪れた県内のパーキンソン病患者らで作る「友の会」関係者から活動への参加を呼びかけられた。

ひま 2013



患者支え社会につなぐ

温泉が好きで男性の入浴を介助した際は、段差のある広い露天風呂で男性が転倒してけがをしないかと気をまんだが、無事湯船につかった男性が「最高だ!」と叫んだ姿を見て、「その人らしさを尊重すべき」との思いを強めたという。

パーキンソン病は現在、服薬やリハビリ治療が行われているが、症状は緩やかでも確実に進行していく。手足を自由に動かせない姿を他人に見られたくないと、外出を控える患者もいる。その背景には「体を自由に動かせるのは当たり前、という『常識』がある」と考える。

当時、パーキンソン病についてはほとんど知らなかったが、「研究の幅が広がれば」と05年10月、会の交流会に参加。06年8月から

は週1回、当時会長を務めていた畠勲児さん(70)(高岡市)が自宅納屋を改装し

て作ったリハビリジムを訪れるようになった。

今年夏頃には、認知症患者を介護する家族や犯罪被害者、親を亡くした子ども

接するのが基本だが、相手の反応を見ながら介助の手も差し伸べる。忘年会や花見、泊まりがけの旅行にも参加し、交流を深めた。

だが、友の会では、気の置けない患者同士が、床に

吸い付いたように動かせない自分たちの足を指し、「吸盤が生えたみたいだな」などと、根治できない病気を笑い飛ばす場面も目にする。「変えることが難しい世間の常識との折り合いをつけようとする行為ではないか。常識の価値観をジョークで相対化し、ほっとするだけでも意味がある」と、乗り越えられない難題に直面した仲間同士が共感しあい、支え合う意味を強調する。

らのグループを研究する社会学者4人と、「支え合い」をテーマとした本を共同出版する予定だ。

「患者と社会をつなぐ役割を果たしていきたい」と静かに語った。

(文と写真 永野慎一)